

マルクスの資本回転論とスミスの原理 (下)

——個別資本の流通過程の立場から考察した流通手段の前貸と資本の前貸——

前 畑 雪 彦

はしがき

第一章 銀行貸付の規範としてのスミス原理の意義

——地金論争・通貨論争における原理——

第二章 スミスの原理について

第一節 原理の構造

第二節 スミス信用論における原理の位置

第三節 原理の欠陥

(以上前号所載)

第三章 スミス原理の合理的核心

——『資本論』第二卷第一五章の考察を基礎として——

第一節 課題と方法

第二節 原理の合理的核心

むすび

(以上本号所載)

マルクスの資本回転論とスミスの原理 (下)

第三章 スミス原理の合理的核心

——『資本論』第二卷第一五章の

考察を基礎として——

第一節 課題と方法

『資本論』第二卷第一五章「回転期間が資本前貸の大きさに及ぼす影響」の考察を基礎として、これからスミス原理の合理的核心の析出にとりかかるとすることとする。あらかじめ、この課題のための方法的諸前提——これは一五章そのものの諸前提でもある——について記しておく。

第一。これから行おうとすることは、結局、手形割引に代表されるいわゆる銀行の短期貨幣貸付と個別資本の流通⇨再生産過程(資本の回転)との関係を説明することである。このため

には、資本の三つの循環形態のいずれかが、研究の視点を与える足場として、本章の課題に則して選び取られねばならぬと考えられる。そこでまずこの点について。前章で明らかにしたようにスミスの原理は、流通過程を W_1 が W_2 に連続的に転化してゆく場とのみ把える流通観を基礎に、この連続的転化を金属流通手段を持って媒介することに代えて、紙の貨幣たる銀行券を持つてすることを目的として組み立てられていた。それはこのような実物均衡を主体とする流通観と必然的な連結において構成された一個の有機的全体であった。そこで前に指摘した欠陥にもかかわらず原理に合理的内容が含まれているとすれば、これもまたこのような流通観と不可分なものと考えられるべきであろう。そうだとすれば個別資本の流通過程の立場から、具体的に言えば資本の回転の見地から、その合理的核心を抽出するために採用されるべき資本の循環形態は、我々においてもまたスミスと同様に、 G がただ一時的な流通手段として現われるだけの生産資本の循環形態 $P \vdash W \vdash G \vdash W \vdash P$ でなければならぬと思われる。

しかしこの場合、マルクスの立場に立つ我々とスミスとの違いは次の点にある。スミスは、 $P \vdash P$ を資本循環の排他的形態としてそれを理論上絶対化して把握するのに対して、我々は、それを、資本の三つの循環形態の中の特殊な一形態として、すなわちそれを、資本流通が現わす種々の諸関係の中の特殊の一関係を独立的に表示する相対的な一形態として把握する点であ

る。言い換えればスミスは、 $P \vdash P$ を理論上資本循環の専一的形態とすることによって、原理を、信用制度と資本流通との関係における唯一の関係として固定し、それを絶対的な規範とせざるを得なかったのに対して、我々は、 $P \vdash P$ を、資本の三つの循環形態の中の単なる一形態とすることによって、原理の合理的核心を、信用制度と資本流通との種々の関係の中の特殊な一関係を表わすものと、限定して把握することができ、こうしてこの諸関係全体の中にそれを独自の一契機として位置づけることができる点である。

スミス原理の合理的核心抽出に際して、採用されるべき資本の循環形態が $P \vdash P$ であるならば、我々がこの課題解決のために拠所とする『資本論』第二巻第十五章においてもまた、 $P \vdash P$ 循環が採られているはずでなければならぬであろう。そこでこの点を見ておくことにする。第一章のテーマについて、マルクスは次のように記している。「われわれがこの章で取り扱っている対象の性質——生産資本の流動部分の回転〔すなわち $P \vdash W \vdash G \vdash W \vdash P$ 〕——は、この資本部分そのものの性質から出てくるのである。一つの労働期間〔ここでは生産期間とイコール〕に充用された流動資本は、その回転を完了するまでは、すなわち商品資本に転化し、商品資本から貨幣資本に、貨幣資本から再び生産資本に転化するまでは、〔 $W \vdash G \vdash W$ を媒介して P から P へと回転するまでは〕、新たな労働期間に充用することはできない。それゆえ第一の労働期間にすぐ第二の労働

期間を連続させるためには、また新たな資本が前貸されて、生産資本の流動的要素に転化させられなければならないのであり、しかも第一の労働期間のために前貸された流動資本の流通期間によって生ずる間隙をうずめるのに十分な量でそれがなされなければならないのである。それだからこそ、流動資本の労働期間〔流通期間の書き誤りであろう〕の長さが労働過程の経営規模に影響するのであり、また前貸資本の分割や新たな資本部分の追加に影響するのである。そしてまさにこの点こそは、われわれがこの章で考察しなければならなかった点なのである」〔『資本論』第二巻、ヴェルケ版、二八一ページ、訳、三四一―二頁、傍点引用者〕。ここでは次のように言われている。流動資本の再生産過程は商品の流通過程によって媒介されている。それ故流動的生産資本がこの形態に復帰するためにそれが流通資本の形態に移行している流通期間——すなわち流通資本として運動している期間——は、その資本部分は生産過程の外部にあり生産は中断せざるを得ない。この中断を防ぐには、流通資本の形態に移行している資本の他に別の資本が、流通期間に規定された量だけこの期間にわたって余分に投下されねばならない。この点は労働過程の経営規模や新たな資本の追加に影響する。そしてこの点の説明が一五章のテーマである。

さて、この問題にとつての要点は、流動的生産資本がかかる形態に復帰するためには、商品の流通過程を通過しなければならず、これによってその期間生産過程は空となり中断せざるを

得ぬという事実である。つまり生産過程の反復に際して、流通期間が、生産過程と生産過程との間隙となり、価値・剰余価値生産の中断時間として現われる点である。このようなものとしての流通期間を、資本回転に含まれる必然的契機として発見するには、マルクスが右にしているように $P::P$ 循環形態による以外にはないであろう。何故なら個別資本の回転に含まれる諸契機を析出するにあたって、そのために採られるべき循環形態がマルクスの指摘するように $G::G$ か $P::P$ かであるならば、生産過程と生産過程との隙間としての流通期間は、生産過程の繰り返しとそれの周期的中断との双方を必然的なものとして指示する、 $P::W|G|W::P$ をもって抽出する以外にはないからである。⁽⁵⁾ 以上、一五章においても $P::P$ 循環形態において対象が考察されていることを見た。⁽⁶⁾

第二。原理の合理的核心抽出のための第二の前提は次のものである。大工業生産を所与とした場合、生産の連続性に対する要求を、生産の社会的形態にかかわりのない労働過程の技術的諸条件それ自体から生じるものとして、まずは把握する点である。非商品生産社会（例えば社会主義社会）でも大工業生産の許では、生産は連続的でなければならぬ。生産は、跡切れることなく反復しなければならぬという、発展した生産力段階の労働過程に一般的な事情は、商品生産社会では、この社会にのみ個々の商品流通をつうじてはじめて実現される。そしてここから、生産の連続性維持のためのこの社会に特殊の新たな条件

——非商品生産社会には存在しない条件——が生じる。つまりこの特殊な条件は、直接には資本関係からではなく商品関係から生じる。そして商品関係から発生するこの特殊な条件の分析が、本章のさしあつたつての課題である（そして次にこの止揚のメカニズムが考察される）。それ故この問題の解決のためには、生産の連続性に対する要求は、大工業生産に内在的な生産力的条件自体から生じる自然的なものとして、まずは把握する必要がある。マルクスもまた一五章で次のように述べている。「生産過程の規則的な中断は近代的大工業の経営とはおよそ結びつかないものである。この連続性は、それ自身、労働の生産力なのである」〔資本論〕第二巻、ウェルケ版、二八三ページ、訳、三四四頁。

またこの前提は、スミスの把握する資本流通形態であるP:P循環をここで採用したことも調和する。と言うのは、G:P:P:GのPと較べてP:P:PのPは、生産過程の資本主義的性格を忘れさせる傾向を持つからである。すなわちそれは、Pのあらゆる社会に共通な労働過程としての側面をハッキリと示すのである。

第三、最後の前提。生産過程と生産過程との隙間としての流通期間を、生産過程から出てきた商品の在庫形成期間とここでは仮定する。⁽⁹⁾すなわちマルクスが一五章でそうしているように、流通期間イコール販売時間とする。そしてこの商品在庫を、社会主義社会でも生産（＝消費）の連続性を支える物質的

条件として、必然的に形成されねばならぬ生産・消費在庫の商品形態と想定する⁽¹⁰⁾。従つてここでの商品在庫量は、いわゆる適正水準にあり、商品在庫形成期間＝労働過程の隙間としての流通期間は、社会形態にかかわりのない在庫形成期間の、商品生産社会に特殊な現象形態と規定される。市場にいちどきに投入された、慣習的に決められた一定分量の商品は、この在庫形成期間にわたつて漸次的に販売され、この期間の終わりにはそのすべてが貨幣形態に転化する⁽¹³⁾。工場のすぐ外に正常量の商品在庫が常に存在することによって、この中に、生産したばかりの商品を売り手としてつけ加えた資本家は、買い手としては、必要とする原料・補助材料の流動資本の諸要素を、そこから貨幣と交換にいつでも即座に引き出すことができ、彼の再生産過程を中断なく進行させることができる。つまり、商品資本在庫は、一方では再生産過程の中断の条件として現われ、他方ではその流動性の条件として現われるのである⁽¹⁴⁾。それ故マルクスが一五章でそうしているように、購買時間イコールゼロの仮定も、すでに成立している。

以上、スミス原理の合理的核心を抽出するに際して、このための次のような方法的前提について述べてきた。一、スミス原理自体に則して、また我々が拠所とするマルクスの一五章に基づいて、P:P:W/G:W:P循環形態を採用する。二、生産過程の連続性に対する要求を、大工業生産の技術的諸条件自体から生じる自然的なもの——この側面から——さしりあつたり把

握する。三、生産過程の反復に際して生じる労働過程の隙間としての流通期間を、商品在庫の形成期間とし、そしてこれを、あらゆる社会に共通な生産物在庫形成期間の商品生産社会に特殊な現象形態として規定する。

課題そのものに取り組むこととしよう。

(1) 後の注(4)参照。

(2) 「 $G \text{ も } g \text{ も } \dots [P \dots W' \text{---} G \text{---} W \dots P]$ 」ではただ一時的な流通手段として現われるだけなので、貨幣の特性も貨幣資本の特性も見落とされがちであり、全過程が単純な自然的なものとして現われる」(『資本論』第二巻、ヴェルケ版、九六ページ、訳、一一五頁)。

(3) 信用制度(貨幣市場)と資本の流通過程との間には次のような諸問題―諸関連がある。貸し出し面(貨幣市場に対する産業資本家の側からの貨幣需要の側面)では、銀行が貸し付ける貨幣の性格規定の区別の問題、すなわち本稿で扱っている流通手段の前貸と資本の前貸との区別の問題、預金面(貨幣市場への産業資本家の側からの貨幣供給の側面)では、短期性・長期性の預金源泉として、それにどのようなものがあるかという問題(もとよりこれらに先行して、信用制度の成立の必然性についての問題がある)。スミスは、 G を理論上 $W \text{---} G \text{---} W$ の過程的統一における G とのみ理解する貨幣観に規定されて、言い換えれば蓄蔵貨幣を否定する考え方に導かれて、信用制度と資本の流通過程との関連を貸し出し面からのみ把握し、その上で信用制度の役割は、 $W \text{---} G \text{---} W$ の流動的統一における G のみを、銀行券で供給することにあるとした。マルクス貨幣論の研究者によって蓄蔵貨幣についての多くの論文が書かれてきた

マルクスの資本回転論とスミスの原理(下)

(前掲『信用論研究入門』九五―六頁参照)が、これらの人々は、右の関連をスミスとは逆に預金面からのみ把握し、預金供給源泉としての蓄蔵貨幣を資本の流通過程の中に求めるだけである。これに対してヒルファディングは、『金融資本論』第一編「貨幣と信用」において、信用制度と資本の流通過程との関連を、貸し出しと預金との両面から、粗雑な仕方ではあるが把握しようと努めた。貸し出し面における「流通信用」と「資本信用」との彼の区別は、右の粗雑な把握の結果として難点と不明瞭さを伴ってはいるけれども、流通手段の前貸と資本の前貸との区別を表わすものとして、彼の信用理論のメリットをなすものと言えよう。『金融資本論』第四章「産業資本の流通における貨幣」第五章「銀行と産業信用」参照。

(4) 資本回転論の序論とも言べき「第七章回転期間と回転数」において、これから扱かわれるべき回転論の諸問題の解決のために、これら諸問題に照らして $G \dots G'$ か $P \dots P$ かのいづれかの形態が採られねばならぬという注意を、そうしなかった先行の経済学者を批判しつつ、マルクスは次のように述べている。「…形態Ⅲ〔 $W \dots W$ 〕は、個別資本の運動が社会的総資本の運動との関連のなかで把握される第三篇にとって、重要である。ところが、それは資本の回転の考察には利用できないのであって、資本の回転は、つねに貨幣か商品(生産資本の諸要素として買入れられた A と P_m 、つまり $P \dots P$ の出発点の P と考える以外にはないと思われる)かどちらかの形態にある資本価値の前貸が始まるのであり、またつねに、循環する資本価値が前貸されたときの形態で帰ってくることを条件とするのである。循環Ⅰ〔 $G \dots G$ 〕とⅡ〔 $P \dots P$ 〕のうちでは、剰余価値形成への回転の影響がおもに注目されるかぎりでは前者が固持され

るべきであり、生産物形成への影響がおもに注目されるかぎりでは後者が固持されるべきである。経済学者たちはさまざまな循環形態を区別しもしなかったし、それらを資本の回転に関連させて別々に考察しもしなかった。」（『資本論』第二巻、ヴェルケ版、一五五ページ、訳、一八九頁。）

なお、従来マルクス研究者によっても十分な考慮をはらわれてきたとは見うけられない。この方法的注意は、信用制度と資本の流通 \parallel 再生産過程との諸関係を考察する際にも尊重されねばならぬと考えられる。

(5) 「循環 $P: P$ は、ただ生産資本の周期的な更新として現われるだけではなく、同様にまた流通期間が終わるまでの生産資本の機能の中断、生産過程の中断としても現われるであろう。」（同右、ヴェルケ版、一〇五ページ、訳、一二六頁。）

$G: G$ は生産の必然的繰り返しを表示しない。またそれは流通過程を再生産過程の媒介としても表わさない。それ故生産過程と生産過程の隙間としての流通期間という契機は、 $G: G$ によっては抽出できない。

(6) 第五章の冒頭でマルクスは次のように記している。「この章と次の二六章では、回転期間が価値増殖に及ぼす影響を取り扱う」（同右、ヴェルケ版、二六〇ページ、訳、三二四頁）。この一五章の課題についての指摘が、後の第三巻第一編第四章「回転が利潤率に及ぼす影響」（ここで一五章が顧みられている。なおこの章は表題があるだけで、本文はエンゲルスのもの。三巻序文参照）に連絡していく事柄をさすとすれば、つまり一五章の課題が具体的には利潤率に関することならば、「循環 $I[G: G]$ と $II[P: P]$ の

うちでは、剰余価値形成への回転の影響がおもに注目されるかぎりでは前者が固持されるべき」に従うとすれば、この章で採用されるべき循環形態は、 $G: G$ でなければならぬことになる。確かに、この章で、回転と利潤率の問題に接続する論点が考察されている。それは、ここで、資本の回転数について種々の計算が試みられていることから判る。そしてこのためには、計算貨幣の機能に基づいて $G: G$ が採られねばならない。また回転期間を九週間と一定し、これを構成する労働期間と流通期間との割合が種々変わるモデルを設けていることは、価値生産の期間としての労働期間とそれを生産しない流通期間との様々な比率を問題としているようにも考えられる。すなわち資本価値の一定量が価値を生産する V と生産しない C とに分かれる割合を示す有機的構成と類似の関係、並びに生産部門での有機的構成の相異が平均利潤率形成の前提であるが、これと同様の生産部門での回転構成の相異とも言うべき関係を、ここで問題としているようにも考えられる。しかしこの第一五章では、こういった利潤率につながる問題だけが扱われているのではない。この点は、この章に貨幣市場が登場していることから判る。また『経済学批判要綱』の「資本の必然的傾向は、流通時間を持たない流通であり、そしてこの傾向は、信用と資本の信用機構との基本規定である」という周知の文言からも明らかであろう。つまりこの章では、第三巻の利潤論につづく問題と信用論に關係する問題とが同時に扱われていると考えられる。換言すればこの章には、相関連してはいるけれどもそれぞれ別個の循環形態において考察されるべき別個の問題が、截然と区別されることなく混在して扱われていると、私には思われるのである。そしてこの点が、第二巻でも特に重要な

一五章の理解を困難にする原因とも考えられるのである。

また、「流通時間なき流通」の問題、すなわち商業信用による流通時間の止揚とその限界、この限界の手形割引による突破、これらの関係を通じての銀行信用の必然性について、多くの信用論研究者が、いわゆる「新しい信用論」の構想の下に強い関心を抱いているにもかかわらず、価値・剰余価値生産の中断時間としての流通時間が『資本論』で正にサブゼクトとして扱われているこの章が、かかる立場から、今日まで立入って研究されてこなかった理由も、右の困難と無関係ではないと推察される。

私が、スミス原理＝真正手形理論の合理的核心を析出するにあたって、拠所とするマルクスの理論は、このような一五章で述べられているものうち貨幣市場に関係する側面のものである。それ故以下の本稿の考察は、一五章のこの側面の研究ともなる。

なお一五章をもっぱら利潤率との関連で研究した興味ある労作として、次のものを挙げておく。頭川博「資本の回転と価値増殖——『資本論』第Ⅱ巻第二編の解明——」、『高知大学学術研究報告』第三〇巻、社会科学、昭和五六年七月。

* 『資本論』第二巻、ヴェルケ版、一五六ページ、訳、一八九頁参照。

(7) 「連続性は、資本主義的生産の特徴であって、その技術的基礎によって必然的にされている。」(同右、ヴェルケ版、一〇六ページ、訳、一二六頁、傍点引用者。)

(8) 「運動の一般の形態、 $P \dots P$ は、再生産の形態であって、 $G \dots G$ のように価値増殖を過程の目的として示してはいない。それだからこそ、この形態は古典派経済学にとって次のようなことをまますま

マルクスの資本回転論とスミスの原理(下)

す容易にするのである。すなわち生産過程の特定の資本主義的形態を無視して、生産そのものを過程の目的として示すこと、したがって、一部は生産の更新($G \dots W$)のため、一部は消費($G \dots W$)のために、できるだけ多くをできるだけ安く生産して生産物をできるだけ多方面の生産物と交換することを過程の目的として説明することを容易にするのである。」(同右、ヴェルケ版、九六ページ、訳、一五頁、傍点引用者。)

もとより、 $P \dots P$ は生産資本の循環形態であって、この P は、労働過程であると同時に価値増殖過程でもある。「 $P \dots P$ 」循環の意味するものは、生産資本の周期的に繰り返される機能、つまり再生産であり、言い換えれば価値増殖に関連する再生産過程としての生産資本の生産過程である。」(同右、ヴェルケ版、六九ページ、訳、七九頁、傍点引用者。)本文中、生産の連続性に対する要求は、大工業生産に内在する労働過程の技術的諸条件自体から生じるものと、まずは把握すべきだと述べた。これはもちろん、次の段階では、連続性の要求が価値増殖関係としての資本とのかかわりで問題となる、という意味である。

(9) 商品の流通期間は、その運輸時間と在庫形成期間とからなる(同右、ヴェルケ版、二五一—二二ページ、訳、三〇四—三五頁参照)。単純化のために運輸時間をここでは捨象する。

なおマルクスは『要綱』で次のように述べている。「われわれはここでは、生産物の市場への物理的な意味での搬入を零にイコールと計算する。あるいはむしろそれを直接的生産過程に算入する。生産物の経済的流通は、生産物が商品として市場に存在することになつて、はじめてはじまる——生産物はそのときはじめて流通する。

ここでは流通の経済的諸区別、諸規定、諸契機だけが問題であり、完成生産物を第二局面である商品としての流通にもちこむための物理的諸条件は問題でないことは、原料を生産物に転化させるための技術的過程がわれわれにとって関係がないと同様である」（ディーツ版、五一七—八ページ、訳、Ⅲ五六—九—七〇頁）。

(10) 「商品在庫が在庫の商品形態でしかないものであって、この在庫は、もしそれが商品在庫として存在しないならば、社会的生産の与えられた規模の上で生産用在庫（潜在的な生産財源）なり消費財源（消費手段の予備）なりとして存在する」（『資本論』第二巻、ヴェルケ版、一四九ページ、訳、一八〇—一頁）。

スマスは、原理を展開している編で、商品在庫について述べているが、彼はそこで「在庫の形態を在庫そのものと混同している」（同右、ヴェルケ版、一四二ページ、訳、一七二頁）。これは、彼の商品理論に価値形態論が欠けているからである。

(11) 「商品在庫は、与えられた期間にわたって需要の大きさにたいして十分であるためには、ある程度の大きさを持っていなければならない。・・・市場にある商品の一部分は、他の部分が流動して貨幣に転化しているあいだ、絶えず商品形態のまま、でなければならない。他の部分が流動しているあいだは、停滞している部分も、在庫そのものの大きさが減って行くにつれて、絶えず減って行き、ついには残らず売れてしまう。だからこの場合には商品の停滞は商品の販売の必然的条件とみなされるのである。・・・商品在庫が商品流通の条件であり、しかも商品流通のなかで必然的に発生した形態でさえもあるかぎり、つまりちょうど貨幣準備の形成が貨幣流通の条件であるように、この外観上の停滞が流動そのものの形態であるかぎり

で、ただそのかぎりでのみこの停滞は正常なのである。」（同右、ヴェルケ版、一四八—九ページ、訳、一七九—一八一頁。傍点引用者）
マルクスは、ここで、適正量の商品在庫と貨幣準備金^{II} 貨幣準備金をと、商品・貨幣の流通の恒常性を支える条件として、共通の動きをなすものと指摘している。貨幣準備金は貨幣流通の恒常性を支える、言わば貨幣在庫と言いうるのである。なおこの点については、三宅義夫『貨幣信用論研究』（未來社、一九五六年）三五頁参照。

(12) 分離性の生産物、例えば糸の場合、一定の慣習の大きさに達してから、はじめて市場に出される。この一定のかたまりとしての慣習量は生産規模を物質的基礎とする。またここから、分離性の生産物の市場に出す量を生産するのに必要な労働期間も決定される。

「労働期間の長さが引渡し量の大きさ（生産物が商品として通例市場に投ぜられる量的な規模）にもとづいているかぎりでは、それは慣習的な性格をもっている。しかし、この慣習そのものは、生産規模をその物質的な基礎としている」（同右、ヴェルケ版、三二八—一七頁、訳、三八七頁）。

(13) 注(11)参照。

(14) 「市場にある商品、したがって在庫の姿にある商品としては、商品資本はどの循環でも二度現われる。すなわち一度は、その循環が考察される過程進行中の資本自身の生産物として現われ、もう一度は、これに反して、買われて産業資本に転化させられるために市場に見いだされなければならない別の資本の商品生産物として現われる。：生産・再生産過程の流れは、大量の商品（生産手段）が絶えず、市場にあるということ、つまり在庫を形成しているということとを必要とする。：過程を進行している資本価値、それはすでに商

品生産物に転化して、今や売られなければならないのであり、言換えれば貨幣に再転化させられなければならないのであり、したがってそれは今や市場で商品資本として機能するのであるが、このような資本価値の立場に立って見れば、商品資本が在庫を形成しているという状態は、目的に反する自発的でない市場滞留である。売れ行きが速ければ速いほど、再生産過程はよどみなく流れる。形態転化 $W \rightarrow G$ の滞留は、資本の循環のなかで行なわれなければならない現実の物質代謝を妨げ、資本がさらに生産資本として機能することを妨げる。他方、 $G \rightarrow W$ にとっては、市場にいつでも商品があるということ、すなわち商品在庫は、再生産過程の流れの条件として現われるのである。」(同右、ヴェルケ版、一三九—一四〇ページ、訳、一六八—一九頁。)

『要綱』における、生産時間の否定時間としての流通時間——このようにまわりくどく言うのは、『要綱』には、資本が生産過程を通過する時間、つまり生産時間、これを流通時間と与える考え方もあるように思うからである——を、具体的問題とする場合、『資本論』第二巻でマルクスが現に行なっているごとく、商品在庫を様々な角度から研究することが大切である。ところが「新しい信用論」の論者はそうでないので、彼等の研究の現在の支配的傾向に見られるように、この問題は、いたずらに観念的な方角で論議されてしまっているのである。

第二節 原理の合理的核心

本論文の眼目をなすこの節の研究を次の順序で進める。

(一)、原理の建設の基礎としてスマイスが注目し、「ブルジョ

マルクスの資本回転論とスマイスの原理(下)

ア経済の理解のために非常に必要なものであり、したがってまた実際上でもそのようなものとして痛感されること」(『資本論』第二巻、ヴェルケ版、二五八—九ページ、訳、三二三頁)として、マルクスがその把握の重要性を——これに気づかないブルジョア経済学者を批判しつつ——力説する、個別資本の流通⇨再生産過程において形成される、流動的な貨幣資本部分の析出、すなわち前貸資本価値の「可除部分の恒常的な定在形態としての、流動的な手許準備貨幣資本の抽出。(二)、手形割引に代表されるいわゆる短期貨幣貸付を介しての、右の貨幣資本部分の代位のメカニズムの考察。

まず(一)について。

マルクスがそれにおいて「諸関係が最も単純かつ明瞭に現われる」(同右、ヴェルケ版、二六九ページ、訳、三二五頁)と指摘する設例に基づいて、問題を考察することとしよう。労働期間と流通期間(商品在庫形成期間)とを共に五週間とし、毎週投下される資本額を一〇〇ポンドとする。言い換えれば資本の一回転期間を一〇週間とし、前貸流動資本総額を一〇〇〇ポンドとする。五週間の一労働期間を終えて流通過程に商品形態で出て来た五〇〇ポンドの資本価値は、商品形態から貨幣形態にその全体が変態しきるまで、さらに五週間流通過程に留まらねばならない。すなわち五〇〇ポンドの資本価値は、それが再び生産過程に入りうる状態になるまで生産過程⇨価値増殖過程の外部で、商品形態から貨幣形態への「形態的な変態」(formellen

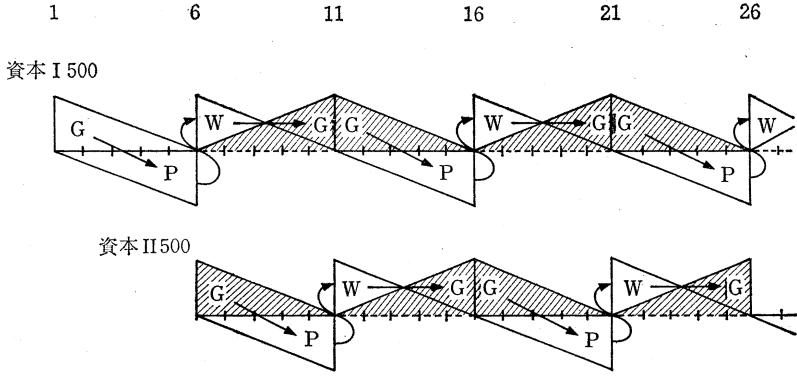
Metamorphosen) を、五週間の商品在庫形成期間にわたって、これから過程進行的に展開しなければならぬ⁽¹⁶⁾。そこで五週間の流通期間生産過程は空となる。この生産過程と生産過程との流通期間の隙間を埋めるために、追加資本の五〇〇ポンドが、この期間にわたってすなわち第六週から第一〇週にかけて、毎週一〇〇ポンドずつ生産過程に投下される。五週間の流通期間が終われば、最初の原資本Ⅰは再び生産過程に入りうる状態に戻っており、流通期間にわたって投下された追加資本Ⅱは、反対に流通過程での「形態的な変態」をこれから開始しなければならぬ。そこで追加資本Ⅱの投下が始まる第六週以降は、資本は、流通過程において商品資本から貨幣資本に転化し、つ、つある部分と、生産過程において貨幣資本から生産資本に転化し、つ、つある部分との二つの部分として同時並行的に存在する。すなわち前貸総流動資本一〇〇〇ポンドは、流通過程において「形態的な変態」を行う五〇〇ポンドと、生産過程において「実体的な変態」(reale Metamorphose) を行う五〇〇ポンドとの二つの資本部分として、資本変態運動を常に同時並行的・過程進行的に相互に交差しながら展開してゆくこととなる。生産過程と生産過程との間隙は埋められ生産過程の連続性は確保されている。しかしこのために、資本は、価値・使用価値を生産する生産過程とそれらを生産しない流通過程との対立する性質をもつ、同時に併存する二つの部面へひきさかれて、二重に存在することとなる。

以上の関係を明晰に理解するため、これを次頁第Ⅰ図のように図式化してみよう。

さて、第Ⅰ図に基づいて、そこに示されている貨幣資本の独自の運動様式に目を向けてみよう。追加資本Ⅱの投下が始まる第六週からはどの期間をとっても、一方での貨幣資本の漸次的減少と他方でのそれと同額の漸次的増加とが同時に生じている。すなわち第六週以降はどの期間をとっても、「一方の手では貨幣が前貸され、他方の手では貨幣が受け取られる」(同右、ヴェルケ版、一〇七ページ、訳、一二七頁)。これによって、前貸資本価値の一可除部分が絶えず生産資本として機能できると同時に、他の一可除部分は、生産過程Ⅱ価値増殖過程の外部で、その成分を絶えず入れ替えてつ常に定在する流動的な手許準備貨幣資本として存在することとなる。この貨幣資本こそ、スミスが彼の原理の組立ての基礎として着眼した「企業家：が貸付をうけぬ場合に、随時的な請求に応じるため、否応なしに寝かせたままの現金 (ready money) で手もとに保有させられるであろうその部分」(『諸国民の富』、キャナン版第一巻、二八七ページ、訳(二)、二八五頁)。あるいは「貸付をうけぬばあい随時的な請求に応じるために、つまりその他の資本部分をいつでも使用しうるようにしておくため、否応なしに寝かせたままの現金でその手もとに保有させられるであろう資本部分：かなりの期間内に、紙幣であれ鑄貨であれ、とにかく貨幣という形態であらゆる商人「あるいは企業家——スミスは商人と産業資本家と

第 I 図

マルクスの資本回転論とスミスの原理 (下)



1. 実線は労働期間（5週間）、点線は流通期間（5週間）を表わす。
2. は、500ポンドの資本が毎週100ポンドずつ投下され、貨幣資本が生産資本に過程進行的に変態してゆくことを表わす。
3. は、5週間の労働期間の後に、500ポンドの生産資本が商品資本に変態したことを表わす（この場合、分離性の生産物の慣習的に決められた一定量、例えば糸の一定量をまとめて市場へ供給するには、5週間の労働期間が必要と仮定されている）。
4. は、糸が5週間かかって販売され、かくして商品資本が貨幣資本へと少しずつ変態してゆくことを表わす。W（糸）は、この期間商品在庫を形成する。商品在庫の減少に逆比例して貨幣の山が築かれてゆく。

なお、資本主義一国の総在庫量は、現実には、商品資本形態の在庫、生産資本形態の在庫、それに個人的消費財形態の在庫の三つの部分に分かれて存在し、一方が大であれば他方が小、逆なら逆という関係にある。この図では、在庫はすべて商品形態にあるものと仮定されている。以上の点については、『資本論』第二巻第6章の在庫についての箇所を参照されたい。

5. W-Gの後のGは、一系列のG-Wの形態で再び生産資本に徐々に変態してゆくが、G-Wが行なわれる一方で、漸次的に減少してゆく形態でG-Wを待機している他方の貨幣資本部分は、それを貨幣としての規定性において見れば、鑄貨準備金（Münzreserve）である。そして、これがスミスの言う「ある国に流通する貨幣の貯量」（the stock of money which circulates in any country）の個別資本の流通過程における実存形態と考えられる。以上の点については、『経済学批判』ヴェルケ版、104ページ、国民文庫版、163-4頁を参照。ここでマルクスがスミスについて言及している点は、特に注意されたい。

を区別していない——」の手もとにたえず選流し、同一の形態でかれの手もとからたえず去って行く：資本：部分」（同右、キヤナン版第一巻、二八九ページ、訳、（二）、二八九頁）と考えられる。また、その把握がブルジョア経済の理解にとつての肝要をなすものと、この節の冒頭で記したようにマルクスが注目する貨幣資本部分に他ならない。一五章では、彼は次のように言っている。「およそ回転の機構については少しも明らかを示していない経済学者たちは、いつでも、この重要な契機を見落としている。すなわち、生産が中断なく進行するためには、実際に生産過程で働いているのはいつでも産業資本の一部分でしかありえないということを見おとしている。一つの部分が生産期間にあるときにはいつでも他の部分は流通期間になければならない。言い換えれば、一方の部分が生産資本として機能することは、他の部分が商品資本または貨幣資本の形態で本来の生産から引きあげられているという条件のもとでしかできないのである。このことが見落とされるならば、総じて貨幣資本の意義も役割も見落とされてしまうのである。」（『資本論』第二巻、ヴェルケ版二六九ページ、訳、三二四—三五頁）

この貨幣資本——流動的な手許準備貨幣資本——のマルクスが右に言う意義を理解するために、今度は、貨幣⇌貨幣資本の側から商品⇌商品資本の側へ視点を移動させて対象をさらに考察してみよう。個別資本の再生産過程においてこのような貨幣資本が形成されるのは、資本家が、一方で労働過程から出て来

た五〇〇ポンドの商品を社会的商品在庫につけ加え、これを五週間にわたって貨幣形態に漸次的に転化させると同時に、他方でその同じ社会的商品在庫の中から彼の労働過程が必要とする原料・補助材料を、毎週一〇〇ポンドの貨幣と交換に漸次的に引き出すからである。すなわち一方の手で商品を少しずつ手放しながら他方の手で商品を少しずつ取り出すために、あるいは一方で商品を生給しつつ他方で商品が必要するから、つまりこのような相反する相互に打ち消し合う流通行為を同時に行うが故に、生産過程⇌価値増殖過程の外部に、一定量の貨幣資本の恒常的沈殿という独自の貨幣現象が生じるのである。これは、畢竟流動資本の再生産に独自の、社会的流通空費としての貨幣の問題に他ならない。労働過程から出て来た彼の労働生産物が、価格形態（商品形態）を取っていなければ、また生産の流動性の普遍的な物質的条件としての彼の工場のすぐ外にある原料・補助材料の生産物在庫が、価格形態をもっていないければ、彼は、一方の手で生産物を社会的生産物在庫につけ加えると同時に、他方の手でその中から必要とする生産物を取り出すことにより、ただ単にこれだけの操作によつて、つまり在庫形成を媒介にして、生産物と生産物とを交換することによつて支障なく労働過程の繰り返し、すなわち生産過程の連続性を保つことができる——労働生産物が価格形態をとらない社会主義的再生産過程では、この仕方で生産過程の連続性は維持される——。言い換えれば彼が生産物以外にそれと並んで貨幣

を前貸する必要もなく、彼の生産物と引き換えに貨幣を受け取ることもなく、労働過程の反復は隙間なく行なわれる。ところが五週間の流通期間にわたって労働過程が必要とする原料・補助材料は、いま彼が流通過程に送り出した労働生産物と同様に、商品生産社会では、その額にこの生産様式に宿命的な価格形態が附着している、すなわち五〇〇ポンドという白い紙片が貼られている。かくして彼の必要とする原料等は五〇〇ポンドの貨幣と交換でなければ手に入れない。この故に、彼は流通期間という労働過程と労働過程との間隙を埋める目的のためだけに、この五週間の流通期間にわたって、五〇〇ポンドの貨幣を、いま彼が所有している五〇〇ポンドの商品の他に追加的に前貸ししなければならぬ。そしてこの期間に、他方の手に握っている彼の生産物をこれも価格形態をもっているので五〇〇ポンドの貨幣に転化させねばならない。以上のように五〇〇ポンドの追加的な貨幣前貸は、直接的には、再生産過程の連続性の、普遍的基礎としての生産物在庫が、商品形態をとっていることから必要となる。つまり再生産過程が商品流通によって媒介されているという事情から不可避となる。ところが、ここでは、商品は商品資本であり、生産過程は労働過程であると同時に価値増殖過程である。そして貨幣は資本価値の定在としての貨幣資本である。それ故労働過程の隙間を埋める目的のためだけに行なわれるこの追加的な貨幣前貸は、同時にかかる目的をもつだけの追加資本投下となる。だからマルクスは次のよう

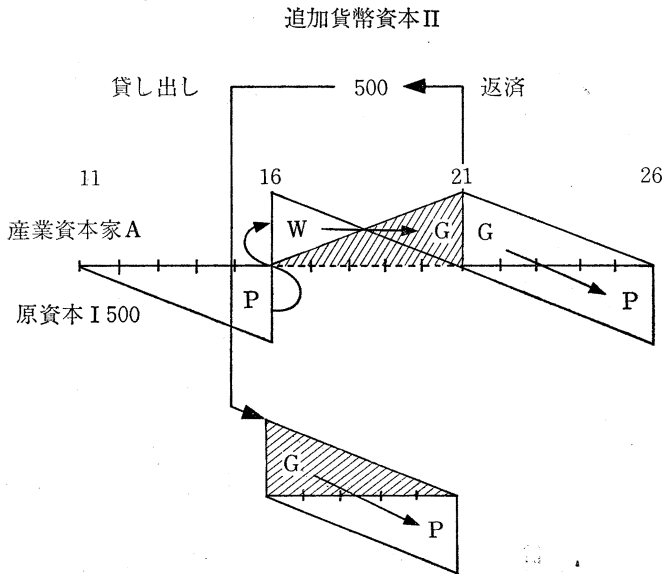
マルクスの資本回転論とスミスの原理(下)

に言う。「追加資本の目的は、ただ流通期間があるために労働過程にできたすきまを埋めるということだけである」(同右、ウェルケ版、二六六ページ、訳、三二二頁、傍点引用者)。かくしてこのような目的をもつにすぎない追加資本Ⅱが投下され始める第六週以後は、一方で貨幣資本の減少運動と他方でのその増大運動とが同時に生じ、その結果、前貸総流動資本の一可除部分は、生産過程Ⅱ価値増殖過程の外部に貨幣形態で不妊のまま空しく放置されることとなる。そしてこのような価値増殖の制限としての貨幣資本の恒常的定在によってのみ、価値増殖過程の連続的進行は維持されるのである¹⁸⁾。

資本主義的再生産過程に内在するこのような矛盾が、産業革命の発端期に立つスミスにおいては、素材的な理解の仕方ではあるけれども、実物資本の「活動的で生産的な資財」に對立する、貨幣資本の「死んだ資財 (Dead stock)」としての把握に彼を向かわせ、そしてこれを銀行券に代位させるとともに、「死んだ資財」を「活動的で生産的な資財」にきりかえる彼の信用論の構想(前章第一・二節参照)を樹立せしめたと推測される。原理Ⅱ真正手形理論と必然的な結びつきにあるスミスの信用貨幣に関する次のマルクスの高い評価は、このことを示唆しているように思われる。「重商主義の妄想にたいする論争に熱中したために、アダム・スミスは金属流通の諸現象を客観的に理解するのを妨げられたのであるが、他方、信用貨幣にかんする彼の見解は独創的であり深遠なものである。」(『経済学批判』

第Ⅱ図

銀行



1. 産業資本家Aは原資本 I = 500ポンドの所有者として、銀行は追加貨幣資本Ⅱ = 500ポンドの所有者として登場している。原資本 I と追加資本Ⅱとの、銀行と産業資本家とへのこのような社会的分裂によって、産業資本家A自身の内部では、原資本 I と追加資本Ⅱとの区別は無くなる。彼に追加貨幣資本Ⅱを負担する必要が無くなることによって、この区別そのものが彼にとっては無くなるのである。A自身の内部では500ポンドの資本があるのみである。
2. この銀行信用を借り手たる産業資本家の立場から見ると、これは彼が商品形態ですでに所有している500ポンドの先取りを意味するだけである。これによって、彼は、自からの再生産過程の流動性を維持するのであり、その拡大を媒介するのではない。
3. 貸し出し期間は流通期間のみである。Aは借り入れたGをG-Wで手放し、他方で同時に行なっているW-Gによってこれを取り戻し、このGをもって返済する。借り入れられたGは、生産期間プラス流通期間の資本の完全な一回転を描かない。それはG-W...P...W'-G'を描かない。前掲拙論第一章、252-5頁参照。
4. この関係を貸し手たる銀行業者の立場から見れば、彼は、価値増殖の制限としての貨幣資本（追加貨幣資本Ⅱ）の貸し出しから、言い換えれば、価値増殖時間を含まない流通期間だけの貸し出しから儲けをひきだす。

てみよう。この場合には次の関係が内蔵されている——商品の信用での売り手Aも、買い手Bも、これまでの想定と同一条件の資本家とする——。第一、五週間後に支払う約束で売られた五〇〇ポンドの商品は、信用買入れた資本家Bの手許でさしあたり生産資本在庫に転化し、このうち毎週一〇〇ポンドずつが生産過程に現実に入ってゆく。つまり商品資本形態から潜在的生産資本形態への在庫の形態変化がまず生じる。第二、原料等を信用買入れた資本家Bは、これによって追加貨幣資本Ⅱの投下が不用となる。彼は商品形態ですでに所有している五〇〇ポンドを、Aから信用を受けることによって五週間（流通期間）早く先取りした。彼は、債務を彼の商品の五週間の販売代金五〇〇ポンドをもって、約束期日に銀行で決済する（銀行への五〇〇ポンドの還流）。第三、信用での売り手Aは、手形を銀行で即日割引くことにより、手形の形態で彼がすでに所有している五〇〇ポンドを五週間（流通期間）早く先取りする。こうして彼もまた追加貨幣資本Ⅱを自からの負担で投下することなく、再生産過程の流動性を維持することができる。この場合、AはBに与えた信用を銀行からの受ける信用によって相殺したのである。この関係をマルクスは次のように言う。「普通の事業家が手形を割引させるのは、自分の資本の貨幣形態を先取りすることによって再生産の流動性を保つためである〔先取りができなければ彼自身が流動性維持のために追加貨幣資本Ⅱを負担しなければならない〕。事業を拡張するためや追加資本を調

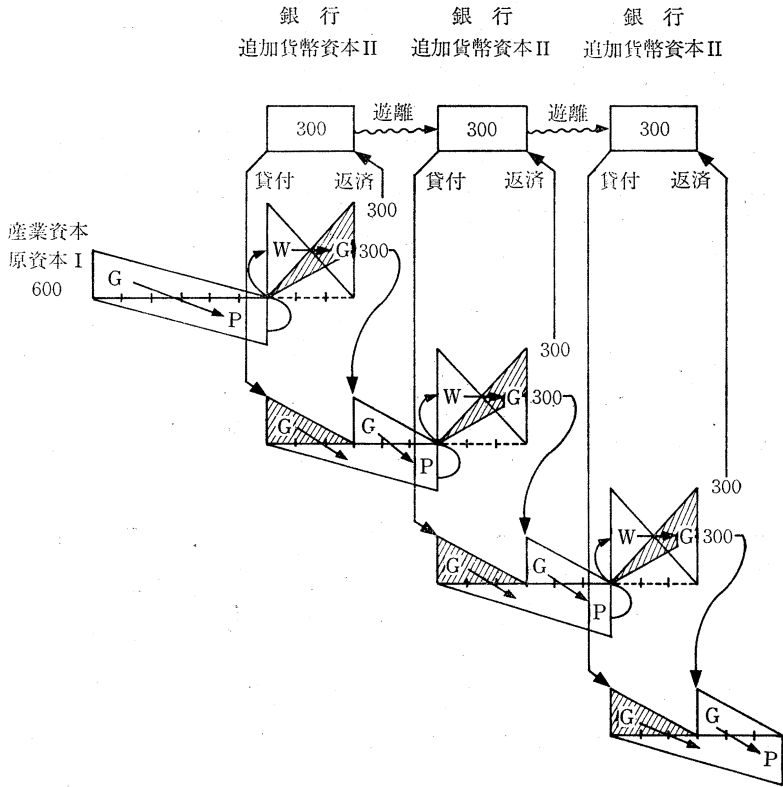
達するためではなく、自分が与える信用を自分が受ける信用によって相殺するためである。∴割引は、じつさいに、ただ、すでに彼の手にある貨幣資本を一つの形態から別の形態に転換することではない」（『資本論』第三卷、ヴェルケ版、四四〇ページ、訳、五四〇—一頁）。第四、銀行は個々の産業資本家に代わって、手形割引の形態で追加貨幣資本Ⅱの五〇〇ポンドを前貸しした。つまり価値増殖の制限としての貨幣資本投下を肩代りした。キャッシュ・アカウントと手形割引との相異は次の点である。前者は銀行と産業資本家Aとの信用関係だけであり、後者はこれにA・B間の信用関係が加わる。これに依りて前者ではAにのみ追加貨幣資本投下の負担の必要が無くなり、後者ではA・B両方でそれが無くなる。他の点では、キャッシュ・アカウントと手形割引とは同じである。すなわち両貸付形態とも、これによって個々の産業資本家は、追加貨幣資本Ⅱの投下を自からの所有資本の中から行うことなく、彼等の再生産過程の連続性を維持することができる。こうして、流通期間の間隙を埋めることから生じる、価値増殖の制限としての貨幣資本から解放される。

産業資本家へのキャッシュ・アカウントあるいは手形割引を介するこのような貨幣貸付を銀行業者の立場から見ると、これは、「企業家の営業のための資本の金額ではなく、またこの資本のかなりの部分でもなくて、彼が貸付をうけぬ場合に、随時的な請求に応じるため、否応なしに寝かせたままの現金で手

第Ⅲ図

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

マルクスの資本回転論とスミスの原理 (下)



1. 労働期間と流通期間とが並行しない、言い換えれば労働期間のみがあって流通期間がない三週間（例えば第10週～第12週）だけ、追加貨幣資本IIの遊離が生じている。何故ならIIは、流通期間という労働過程の間隙を埋める目的をもつにすぎないから、それが無ければ不用なのである。
2. 追加貨幣資本IIも産業資本家の所有とすれば、その遊離は彼の再生産過程で生じる。IIを銀行の所有とするこのケースでは遊離しているIIは、その期間他の産業資本家の流通期間を埋めるために貸し出すことができる、その場合には、遊離は生じない。この点が、IIを産業資本家が所有する場合と銀行が所有する場合との違ひである。言い換えれば流通資本としての追加貨幣資本IIが、銀行業者の所有資本として産業資本から分離すると、産業資本は、銀行を媒介としてそれを共同利用することができ、この貨幣資本部分を社会的に節約することができる。だがこれとともに追加資本IIは、流通資本としてのその個有の限度を突破する独自の運動を展開しうることにもなる。この点は、この貨幣資本部分の産業資本からの独立化の第一歩である商品取扱資本を扱う別稱で、この資本に則してまず論じる予定である。

もとに保有せられるであろうその部分の」(同右キヤナン版、第一巻、二八七ページ、訳、(二)、二八五頁)貸付と言うことになる。

そして返済が流通期間中に、従って短期間にとどこうりなく行なわれる限り、「この銀行の金庫は、水の不断の流出量と流入量とが全く等しい池のようなものであり、…つねに同じかまたはほとんどまったく同じ程度の水をたたえている池のようなもの」(同右、キヤナン版、第一巻、二八七ページ、訳、(二)、二八六頁)である。

この場合、価値増殖の制限としての貨幣資本(追加貨幣資本Ⅱ)の貸し出しから、言い換えれば価値増殖時間を含まない流通期間だけの貨幣貸し出しから銀行業者は儲けをひきだす。⁽²¹⁾

この貨幣貸付が、金属貨幣ではなくこれを準備とする兌換銀行券で行なわれるならば、流通過程における金属貨幣そのものの節約となる。この場合銀行券は、これを貨幣流通の側面から見るならば、資本の再生産過程において流動的な手許準備貨幣資本の形態で実存する鑄貨準備金(第Ⅰ図の5参照)に、代位するものと考えられる。つまりマルクスの言う「資本の流通手段」(『資本論』第二巻、ヴェルケ版、七八ページ、訳、九一頁)⁽²²⁾に代理するものと思われる。

最後に次の点をつけ加えておく。これまでの考察はすべて、労働期間と流通期間とが等しいモデルによるものであった。これを用いたのは、それが諸関係を「最も単純かつ明瞭に現わ」るので、スミス原理の合理的核心を抽出するのに、最も都合が

よいと考えられたからである。ところで、この設例は、追加貨幣資本Ⅱの遊離の生じない「例外的」(同右、ヴェルケ版、二八二ページ、訳、三四三頁)なものである。そこでその遊離が生じる「通例」(同右)⁽²³⁾の場合の貸付モデルを示しておきたい。労働期間六週間、流通期間三週間、毎週の流動資本投下額一〇〇ポンド。従って流動資本の一回転期間九週間、前貸流動資本総額九〇〇ポンド。労働期間に投下される原資本Ⅰ一六〇〇ポンドを産業資本家が所有し、流通期間に投下される追加貨幣資本Ⅱ一三〇〇ポンドを銀行が所有する。

前頁の第Ⅲ図は、資本Ⅱの三週間の遊離が生じる以外はすべて先の設例が示したのと同じ関係を表わす。

(15) 『資本論』第二巻、ヴェルケ版、五六ページ、訳、六五頁、ヴェルケ版、一九八ページ、訳、二四一頁参照。

(16) 「…資本の本性は、資本が流通のさまざまな局面を通過すること、しかもある概念から他の概念への変遷のあいだに、一瞬のうちに急変する表象のかたちで通過するのではなく、時間的に継起する状態として通過するということを想定している。資本は蝶としてとべるまでには、しばらくのあいだ蛹になっていたいなければならない」(『経済学批判要綱』、ディーツ版、四四七ページ、訳、Ⅲ、四八五頁、傍点引用者)。

(17) 注(15)参照。

(18) 『要綱』の例の一節すなわち「流通時間なき流通」とここでの基礎である『資本論』第二巻第一章との関係については、別稿で

本格的に取りあげる予定である。

- (19) この場合、五〇〇ポンドの追加貨幣資本Ⅱは、貨幣としては、社会的共同在庫へ附加した生産物の反対給付として、必要とする生産物をそこから引き出す為の指図証券と共通する一面をもつ（前掲拙論(一)二七七ページ参照）。(ここから、銀行主義理論リスマス原理のドイツ版ともいわれるヴェンディクセン(F. Bendixen)の貨幣理論、すなわち貨幣の本質を指図証券と規定する考え方が生じたと推測される。ヴェンディクセンの理論(典型的貨幣 *Klassische Geld* に *Grundriss* は *Das Wesen des Geldes*, Leipzig 1908, 3. Aufl. Mittheil. 1923 (大蔵省理財局訳『貨幣の本質』大正一〇年、主として「第二編貨幣の経済的性質及び貨幣の創造」を見られたい)、高橋泰蔵、前掲書所収、「共同体」経済観と「典型的貨幣造出」論——「指図証」説の研究」を参照。

(20) 手形割引は銀行による流通手段前貸の典型的な形態であるうと、久留間健氏は述べておられる。同氏前掲論文、(中)、八六頁参照。

(21) 「資本の努力が、一方では流通時間をもたない流通であるとするれば、他方ではそれは、流通時間と流通の過程を媒介するさまざまな機関において、そのものとしての流通時間に生産時間の価値を、すなわち価値を与えようとする試み、流通時間のすべてを貨幣として、またいっそう進んだ規定では資本として措定しようとする試みなのである。これが信用の他の一面である。」(『経済学批判要綱』、ディーツ版、五五二ページ、訳、Ⅲ、六〇九頁。)

(22) 『経済学批判』で蓄蔵貨幣と明確に区別されている鈍貨準備金は、これに先行する『経済学批判要綱』と後続する『資本論』第二

マルクスの資本回転論とスマスの原理(下)

巻のいくつかの箇所、蓄蔵貨幣と規定されている——私もこのように解釈するのだが——という、ある意味でやっかいな問題がある。この周知の論点については別の機会に私見を述べたい。なお蓄蔵貨幣・鈍貨準備金の諸問題については、久留間健造編『マルクス経済学レキシコン』第一三巻(大月書店、一九八二年)、「采」No. 12を参照。

(23) この一五章の貨幣資本の遊離の考察について、エンゲルスは「事実上あまり重要でない事情を不当に重要視」(『資本論』第二巻、ヴェルケ版、二八六ページ、訳、三四八頁)しているとマルクスを批判して、自から遊離の生じる種々のケースを解明し、その最後の所で「この私の追記によってはせいぜい(マルクスの分析が)補強されるだけ」(同右、ヴェルケ版、二八七ページ、訳、三四九頁)だと述べている。「商人の日常の实地計算に習熟」(同右、ヴェルケ版、二八六ページ、訳、三四八頁)していると見られるエンゲルスの設例を眺めると、彼が注目しているのは、結局、前貸資本量(例えば九〇〇ポンド)と充用資本量(毎週一〇〇ポンド)との乖離から生じる一般的な遊離でしかないことがわかる。これは、注文中で生産過程が連続する流通時間ゼロの場合——これがマルクスの言う「生産過程から生じる」(同右、ヴェルケ版、二五八ページ、訳、三一一頁)常に定在する遊離貨幣資本の一番の見本である——でも、流通期間にのみ投じられる資本についても生じる。ところがこの章の遊離の考察でマルクスが主要な関心を寄せているのはこれらではなく、流通期間と労働期間との不均等な比率から生じる遊離である。すなわち前貸流動資本の回転から形成される遊離貨幣資本と言っても様々なものがある訳で、その中の特殊の場合——追加貸

幣資本Ⅱの遊離——をマルクスは取上げているのである。マルクスがこれを独自の問題とした一つの理由は、「一年間に何回も回転する社会的流動資本の非常に大きな部分は、一年間の回転循環の中で周期的に遊離資本の形態にある」（同右、ヴェルケ版、二八二ページ、訳、三四三頁）ことを説明するためである。そしてこれを明らかにしたかったのは、流通手段の前貸（この規定は第二巻第三編で説明される）のための貨幣供給源泉を、必然的に形成されたものとして、個別資本の再生産過程の中に求めるためと考えられる。この点は別稿で論じる。エンゲルスは、目につきやすい一般的な遊離現象に目をうばわれて、マルクスの問題意識を理解できなかったように思われる。

(24) マルクスの観点に立つ経営学において、「運転資本管理」という角度からこの一五章が研究されてきた。そこでは、「マルクスの設例の単線連続運動」と異なる「重複連続運動」モデルと言われるものが馬場克三氏によって提出されている。高橋昭三「運転資本管理の諸問題」『立教経済学研究』（第二八巻第三・四合併号、昭和四九年二月）参照。これについてもいづれ取上げたい。

結び

スミスの原理は次の構造をもっていた。一回の流通必要量（流通手段）は、個別資本の流通過程においては、他の形態の資本部分（生産資本・商品資本）を絶えず機能させておくために否応なしに溜めおかれる流動的な手許準備貨幣資本として存在する。そこで銀行券の貸付が、手形割引あるいはキャッシュ

・アカウントを介して、この貨幣資本部分を代理すべく行なわれるならば、これは、(一)、借り手たる産業資本家にとっては、さもない場合に保有しておかねばならぬ右の貨幣資本——「死んだ資財」——の節約となり、(二)、貸し手たる銀行業者にとっては、短期で安全確実な利子生み資本としての銀行券の投下であり、そして(三)、流通過程の全体に対しては、流通必要量に代位してこれに合致する紙券発行となる。

前章において、私は、『資本論』第二巻第一章「回転期間が資本前貸の大きさに及ぼす影響」の考察を基礎として、右の原理に含まれる合理的核心を次の内容において抽出したつもりである。(一)、商品流通に媒介される再生産過程の隙間の無い、回復において、前貸流動資本価値の不可除部分は、価値増殖過程の外部に不可避的に形成される流動的な準備貨幣資本の形態で拘束される。個別資本家は、流通期間に投下される追加貨幣資本Ⅱをかかると期間だけ手形割引などの方法で借りることにより、右の貨幣資本部分を節約できる。(二)、銀行は、追加貨幣資本Ⅱの貸付では、これによってこれから生産される商品の販売からではなく、すでに生産されている商品の販売代金から返済を受ける。すなわち個別資本の流通過程における、この貸付——返済の貨幣還流の法則的基礎は、生産期間、プラス、流通期間の運動時間をもつ、 $G \rightarrow W : P : W' \rightarrow G$ の還流運動ではなく、生産期間（生産過程）と流通期間（流通過程）との並行を不可避とする流動資本の回転運動に内在的な $G \rightarrow W$ と $W' \rightarrow G$ との同時並

行性のモメントである。(1)つまり手形割引に代表されるいわゆる短期貨幣貸付は、それに固有の貨幣還流モメントを、資本の回転運動に必然的な、価値増殖の中断時間としての流通期間にもとづいて客観的合法的なものとして持っている。(2)この貸付が紙の貨幣たる銀行券で行なわれるならば、この銀行券は、それを貨幣流通の側面から見れば、「資本の流通手段」のうち「流通過程から生じる」資本の定形態としての鑄貨準備金に代位すると考えられる。

さて、反地金主義者・銀行学派によるスミス原理—真正手形理論の主張は、銀行貸付がこれに基づく限りでは、それは需要の新たな源泉を形成せず従ってこれによって物価騰貴は生じない、また貸付が不換銀行券で行なわれても、短期の貨幣還流メカニズムによってその過剰流通はひき起こされないというものであった。原理の合理的內容が先の通りならば、次の理由によつてこの見解はこの限りで正当と言えよう。第一、この場合貨幣の借り手は、これをもつて商品の需要者として市場に現われるが、他方で同時にそれに相当する価値額の商品の供給者としても登場する——キャッシュ・アカウントのケース、手形割引では、割引で銀行券を入手した資本家が需要者として出て来る時、債務者が供給者として現われる——すなわちこの場合、資本家は必ずG—WとW—Gの相互に打ち消し合う流通行為の担い手として市場に登場し、超過需要を形成しうる、一方的購買者としては現われないのである。第二、不換銀行券で貸付が

マルクスの資本回転論とスミスの原理(下)

行なわれても、それをG—Wで手放す時、他方で同時に行なわれるW—Gでそれと同額の紙券が引き揚げられて過剰流通は生じない、並びにこの紙券発行は、鑄貨準備金に代位し流通必要量に合致すると考えられる。

最後に、手形割引に代表されるこのような貨幣貸付と区別される、もう一つの貨幣貸付の定在とこれの性質について、極く簡単に指摘して、スミス原理の合理的核心抽出を課題とする本稿を終えることとする。それは、資本の運動の本源的出発点としての貨幣の貸付、すなわちG—W::P::W—Gの還流運動を描く、資本としての貨幣の貸付である。マルクスはこの貨幣の還流形態について次のように記している。

「新しく現われる資本がまず貨幣として前貸しされ同じ形態で回収されるかぎりでは、その産業資本がある事業部門から別の事業部門に移る場合であろうと、それが事業から退く場合であろうと、G::G'が産業資本の循環の特殊な形態になる。それは、はじめて貨幣形態で前貸される剰余価値の資本機能をも含んでいるのであつて、剰余価値が自分の生まれた事業とは別の事業で機能する場合に最も明瞭に現われる。G::G'はある資本の最初の循環でありうる。それは、最後の循環でありうる。それは、新たに投下される資本の形態である。新たに投下されるといふのは、貨幣形態で新たに蓄積される資本としてもよいし、古い資本がある生産部門から別の生産部門に移されるために全部貨幣に転化されて新たに投下される場合でもよいのである。

史著作集』Ⅲ(未來社、一九七六年)同「重商主義の貨幣理論——貨幣的經濟理論の前身——」同上書所収。

(4) 前掲拙論(二・完)第四章参照。

(5) 『經濟學批判要綱』でマルクスは、 $G \cdots P \cdots G$ を描く資本としての貨幣の生産的性質と、従ってまた、これの供給機構としての貨幣市場(Geldmarkt)の生産的性質とについて、次のように記している。「資本としての貨幣(Geld als Kapital)においては、…流通がもはや量的交換としてのその最初の単純性において現れないで、生産の過程として、実在的な素材変換(reatle Stoffwechsel)として現われることによって、貨幣自体が生産用具(Produktionsinstrument)として指定されていることである。このようにして貨幣そのものが、こうした生産過程の特殊な契機として規定されている。生産においては、簡単な価格規定すなわち商品の交換価値の共通単位への翻訳が問題となるばかりでなく、交換価値の創造、したがって価格の規定性の創造もまた問題となる。形態のたんなる指定だけでなく、内容の指定もまた問題となる」(ディーツ版、一三〇—ページ、訳、I、一三七一—頁)。「貨幣市場としての資本(Das Kapital als Geldmarkt)。貨幣市場では、資本はその総体性において指定されている。そこでは資本は、価格を規定するもの、労働を雇用するもの、生産を規制するもの、一言でいえば生産源、(Produktionsquelle)である」(ディーツ版、一八六—ページ、訳、Ⅱ、一九七頁)。

(6) 近代経済学の側でのこの区別に関するマーシャル、ハーン、シエンベーター等の見解のサウヴェイは、樋口午郎『金融論』「第二章 貨幣市場と資本市場」(東洋経済新報社、昭和二十九年)を参照。

マルクスの資本回転論とスミスの原理(下)

(7) 久留間健「流通手段の前貸と資本の前貸(下)」『立教経済学研究所』第二〇巻第四号、六七頁参照。

(8) これを不当に一般化して絶対的な規範としたものがスミスの原理であった。

現代における原理の代表的信奉者として、スミスに選ばれることよって自からの金融論構築を企てられた山口茂氏(同氏『金融総論〔改定版〕』現代商学全集第二九巻、春秋社版、昭和三年、序、参照、氏は非マルクスの金融論分野の代表者の一人である。)を挙げようと思う。氏はその最後の著書で次のように書いておられる。

「市民社会的信用貨幣(原理に基づいて発行された銀行券をこのように氏は規定され、原理から外れて発行されたインフレ通貨に対して、これは通貨価値の安定した安定貨幣だと言われる。)による均衡理論的金融論は、…そのままでは錯綜した流通経済の現実を示すことにならないが、これによって規準理論として、現実がどのようにあるか、正しいか間違っているか、また政治的、恣意的な経済政策の無軌道な進行を反省し吟味する規準となるのではないだろうか。ことに今日の高成長の「ひずみ」を分析し把握する手掛りがあったえられるのではないだろうか。…正しい企業間信用によって生まれた市民社会的信用貨幣をもととする金融論は、規準経済学として現実経済の姿勢を正す根拠であるといわなければならない。」(『恐慌史概説——金融理論における均衡と不均衡』、勁草書房、昭和五十一年、四一—二頁。)

(9) 近代経済学における貨幣理論の二つの潮流、すなわち商品の流通量やその生産量また雇用量に対して貨幣は中立的であるとする「貨幣ヴェール観(Veil of money concept)」と、それらに対して

貨幣は能動的に作用するとする「貨幣的経済理論 (theory of monetary economy)」—現在では、前者はマネタリズムに、後者はケインズ理論に代表されていると考えられる—とは、この区別にもとづいてマルクスの立場から批判的に位置づけられると思う。この点は別の機会に論ずる。右の対立的な二つの貨幣理論については、小林昇、前掲論稿。三上隆三『貨幣的経済理論の研究』（有斐閣、昭和三五年）参照。

(10) なおまた、短期運転資金供給を主とするイギリス型の銀行と長期設備資金供給を主とするドイツ型（大陸型）のそれとの区別も、本質的にはかかる区別に基づいて行なわれるべきものと考えられる。